静岡県俳句協会報

理事会だより（11・9）

一、秋季俳句大会について①神静民報、タウンニュースの大会掲載記事の紹介（事業部、総務部）②総括報告、当日参加が朝方の雨の影響で少なかったこと、会員の投句増加が望まれることなど意見交換（事業部）③会計報告（会計部）

二、秋の吟行会実施報告（会計部　本号4頁）

三、梅まつり俳句大会の投句は現在二十七名、役割分担は次月理事会にて。

四、第77回桜まつり俳句大会は六年四月七日（日）UMECO、兼題等募集要項詳細は次月理事会にて。

五、立春句会は六年二月四日（日）詳細は本号10頁

六、令和6年度秋季俳句大会は六年十月六日（日）UMECO

理事会日程　12／14　1／11　2／8　3／14
（毎月第2木曜日　けやき15時より）

「俳句おだわら」10句抄（675号より）

長谷川きよ志　抄出

青年の弾む言の葉星月夜　高橋　小糸
手と足が先に応へて盆踊り　吉田　康雄
新盆や祖母の筵（むしろ）にたむろして　髙杉掘三朗
迷走する台風ワサビ絞りきる　竹下由里子
捨て屋敷昔をおもふ萩が咲く　勝木　澄子
野の空の灯（あかし）纏ひぬ萩の花　松下　俊之
一句二句できればよろし西鶴忌　二見　和江
花野行く花の詠嘆聞きながら　青木たけを
防災の倉庫てんけん震災忌　青木　勝子
法師蟬や極楽にいくあてもなく　穂坂志げる

山田照子　抄出

手と足が先に応へて盆踊り　吉田　康雄
稲すずめ富士に連なる吊し雲　星　一義
竹伐るや竹二三本騒がせて　高橋久美子
四万十の川は蜻蛉の国となる　瀧本　敦子
諍ひは苦し秋刀魚の腸旨し　伊藤はる子
いかづちに応へてゐたる尾骶骨　瀬戸　悠
双眼鏡小さな秋を引き寄せる　市川めぐみ
駅ビルの通路は迷路いわし雲　加藤かほる
指先へ集める血糖秋深し　小林永以子
ぐうの音も出ぬほど残暑続くなり　小澤　園子

■10月号（675号）「競詠10句」より4句鑑賞、4句抄出（1）

昼深し　陌間みどり

蟬の声墓地を通りてそれっきり　岩楯惠津子

たまたま通りかかった墓地でしょうか、蟬が盛んに鳴いているのを聞いて墓地に葬られた人たちに心を馳せたのでしょう。命を繋ぐべく懸命に鳴く蟬とやはり懸命に生きて今に命を繋いでくれた人たちがここに葬られているのだと。その感傷をそのまま言わず「通りてそれっきり」としたところが秀逸です。墓地を過ぎれば蟬の声も死者への感傷も遠くなり普段の自分が歩いているというのでしょう。

掌を返す先生土手南瓜　尾﨑　一夫

戦後生まれで民主主義教育で育った私ですが、戦前は国家主義、戦後は民主主義を押し付けられた不条理に対する人々の怒りや困惑がこの句から感じられます。全体主義的な愛国心も天皇崇拝も敗戦で一転し民主主義が正義となったのです。勿論民主主義は良いのですが、昨日までの教育の責任は何処へ行ったのでしょう。皆が皆ではないにしても平然と掌を返す先生を土手南瓜だとは言い得て妙です。

■10月号（675号）「競詠10句」より4句鑑賞、4句抄出（2）

秋来たり　畠　梅乃

竹籠に林檎一つのありのまま　石井きよ子

竹籠の中に林檎が一つあるだけ、作者の見せる世界はそれだけである。もしかしたら、少し傷ついていたり、歪んでいたりする、いわゆる訳ありの林檎かもしれない。下五の「ありのまま」に、それを見ている作者の深い眼差しを感じる。リアルタイムで聞いてはいないが、「林檎はなんにも言わないけれど…」という懐メロを思い出した。

最後まで見送る棺驟雨来ぬ　岩楯惠津子

「最期まで見送る棺」は霊柩車のことであろう。親しかった方が亡くなられ、いよいよ火葬場に向かう場面。車は出発してしまったが、目を離せば全てが終わってしまうような気がして、作者は佇んでいるのであろう。そうこうしているうちに、夕立が来てしまった。「驟雨」という激しい言葉が、作者の、死者の、気持を代弁しているかのようである。

墨磨りて李白も杜甫も涼新た　　近藤　久江

書家でもある久江さんらしい句です。新涼の季感がとても良く伝わってきます。丁寧に墨を磨りながら李白の詩や杜甫の詩を心に浮かべ条幅に向かっているのでしょう。墨を磨るかすかな音と匂い、白い紙に生まれる墨書の詩、この静謐さの中に作者は新涼を感じられたのでしょう。それを李白も杜甫もとしたところは心憎いばかりです。

葛の花解に辿れぬ方程式　　佐々木重満

数学に精通している方の句でしょう。数学が苦手な私には、葛の花の抒情性と数学との取り合わせが意外で驚きました。

葛の花は絡み合った蔓と繁茂した葉の中に隠れながらもすっと伸び上がるように咲いています。方程式の解も幾つもの計算をして求めます。難しいほど解けた答えは美しい、とも言えそうです。葛の花と数学の奥深い美しさが解るような気がしてきました。

一句抄出

父を追う子を追いたるや秋の風　　石井きよ子
息ひとつ吐き「月光」へ夏ショール　　竹下由里子
夏帯を強く叩きて一歩出す　　田畑ヒロ子
落款の朱のけざやかや秋深し　　山﨑美知子

書き連ね草書千字や秋気澄む　　近藤　久江

篆書・隷書・草書・行書・楷書を見比べてみると、草書は最も省略が効いていて涼しく見える文字であることがわかる。その分、現代の人にとっては難しく、果たしてどれだけの人が読み書きできるのだろうかとも思う。作者はそれを千字書き連ねたという。当然毛筆であろう。涼しげな千の文字と、墨の香と、書き上げた充実感で、「秋気澄む」の季語が生きている。

動かない大きな岩の八月来　　田畑ヒロ子

八月は日本人にとって特別な月である。夏休み、キャンプなど暑さを楽しむ月でもあるが、他方、原爆忌、敗戦忌があり、盂蘭盆があり、日本人としては、過去の過ちを改めて思い知らされ、一瞬にして死者となってしまった人々を思い、ただ一人のかけがえのない人を思い出すといった重い月でもある。後者の意味で「八月」が「動かない大きな岩」であると言う作者の感性に大いに共感する。

一句抄出

父さんは靖国神社夜学生　　尾﨑　一夫
執権の栄華ちりぢり萩の寺　　佐々木重満
白靴の硬き音たて中央へ　　竹下由里子
掌につつむ鸚哥の鼓動秋の昼　　山﨑美知子

秋の吟行会（南足柄市大雄山最乗寺）

十一月一日（水）朝十時、担当者や参加者が会場の信徒会館へ到着すると、室内にはもう暖房が入り案内の貼り紙等も必要箇所に貼られ、スリッパも並べられておりました。行き届いたご配慮に恐縮しながらも、大変有難く気持良く吟行句会を始めることができました。当日は絶好の吟行会日和で、参加者は早めに受付を済ませ、それぞれ吟行場所に。参加者二十七名、周辺の嘱目をしっかりと句に読み込んで全員定刻に出句。

その後最乗寺、山田老師様の有難くまた有意義な御挨拶（法話）をいただきました。大変示唆に富んだ内容で考えさせられることが沢山ある良いお話でした。

披講、点盛など順調に進み午後三時には終了。参加賞を手に解散しました。（担当　会計部）

三句合点6点以上より一句を自選

香煙の流れ色なき風の中　陌間みどり
秋冷の杉の末（うれ）より降り来たり　芹澤　常子
行く秋の鼓動静かや座禅堂　加藤かほる
慧春尼の火定（かじょう）の物語（はなし）秋日燦　佐々木重満
腹に子を入れて狛犬冬を待つ　菅野　英余

以下自選一句（五十音順）

この寺の一期一会の虫の声　青木たけを
晩秋やいよいよ尖る杉林　新井たか志
秋天を傷つけさうな杉の鉾（ほこ）　池田　忠山
山装う奥の院まで三百段　石井千代子
参道は暗し伽藍は秋日濃し　伊藤はる子
烏瓜ふいに現わる認知症　岡本　史郎
行く秋や沢を出てゆく水の音　小澤　純子
仁王の朱かすみし山の紅葉燃ゆ　小野　菊土
み仏の手にはじきたる木の実かな　片野　節子
太鼓の音全山秋の余韻かな　加藤　富江
天蓋の眩き光冬隣　川本　育子
秋惜しむいつ空を飛ぶ天狗下駄　木村　幸枝
一段づつ秋に深入り奥の院　近藤　久江
秋の蝶もつれて杉の秀から空　齊藤　桂
枯れあじさい坂には坂の歩き方　須田　聡子
相生の杉に注連縄秋気澄む　須田　晴美
ばったもお参り吾と石段すれ違う　武居裕美子
大寺の天狗の声か鵙日和　田中　幸子
何となく灯明の揺れ秋うらら　田畑ヒロ子
光背の湧き出ずる秋観音さま　佃　悦夫
山門を過ぎて聞きたる秋の声　二見　和江
やっと秋大香炉をけぶらせて　山田　照子

俳句おだわら（11・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（10・27）　久江報

紅葉舞ふ草書模様の風の貌　足立　和子
酔芙蓉昔名主の黒板塀　川本　育子
秋天にどこまでとどく竹とんぼ　高橋　小糸
鍼灸師の指の巧みや秋の昼　山﨑　悦子
山の陽を踏めば紅葉のなほ燃ゆる　近藤　久江

◆山北（10・26）　由里子報

包装紙きれいにたたむ夜長かな　和田恵美子
小田原城の老松五本天高し　尾崎　幸子
秋灯やレンチドールのしかめ面　星　一義
草の絮裏返し置くアンケート　石田加津子
腕突っ込み返すジーンズ鵙日和　竹下由里子

◆おほゐ（11・8）　秀泰報

花八手待つ人の無き日々に慣れ　横塚　昌平
生きるとは老いて行くこと落葉掃く　中津川晴江
小春日が続く至福や戦禍由由し　加藤　春江
談笑の真ん中に座す蜜柑かな　高橋みどり
胸元にリルケの詩集銀杏散る　石井きよ子
北限がどんどん延びる蜜柑山　石井千代子
野面積み歴史を被る野紺菊　小野　菊土
みかん狩り里に響きし笑い声　瀬戸とみ子
富士仰ぎ暮らしの中のみかん掩ぐ　香川　花子
はるかなる大地の吐息芒原　中根登美子
仲間皆期間限定茸汁　廣田　悦子
海風と陽に抱かれて蜜柑山　中村　昌男
みかん積む山車（くるま）の軋みちちの背　二上　光子
干し柿の並ぶ軒下幸多し　風間　秀泰

◆春野（10・15）　きよ志報

あらがはず芒の原に溺れゆく　秋山　昇
眠られぬ夜の波音九月尽　伊藤はる子
蓮の実や芸一代の鼓打つ　内田知江子
蛇穴に入る私はどこに潜らうか　尾崎　一夫
恍惚と霧に巻かれてしまひけり　瀬戸　悠
寄ってってと声かけらるる柿日和　二見　和江
一本の木を置き去りに溽暑中　長谷川きよ志

◆沈丁（11・2）　寶子山報

ギターポロンとぎれとぎれの夜長かな　若村　京子
将棋盤敗者（まけ）に寄り添ふ夜長かな　柳澤ミサ子
点滴の残りわづかに夜長飽く　田中　恵一
母とする地名尻とり夜長かな　河本　純子

長き夜や声なきものへ独り言　瀧本　敦子
近頃は浅き眠りや夜の長し　勝木　澄子
長き夜の大活字本すべやかに　菅野　英余
丁寧に生きる手仕事夜長かな　髙井　幸子
捨てがたきもの選りすぐる夜長の灯　片野　節子
石段に木漏れ日ドレミ薄紅葉　峯尾ユキエ
落葉踏む足長影やウオーキング　清水美代子
知らぬ間に足裏冷めて夜長妻　松下　俊之
姫神の御心のまま秋の峯　武居裕美子
赤べこの首振りやまぬ夜長かな　寶子山京子

◆香雨・梅ごち（10・22）　忠山報

家路へと急げば影も秋の暮　肥後ちさこ
缶蹴りの缶置き去りに秋の暮　関戸わよこ
バス停にたつた一人の秋の暮　青山　典子
地下鉄を出でて気がつく秋の暮　門松　鳳文
軽やかな庭師の鋏秋日和　吉田　百代
稲雀一羽の発てばみな発ちて　吉田　康雄
身に入むや朝夕羽織るははのもの　陌間みどり
飲みごろの白湯にうるほひ後の月　小澤　純子
遊具より暮るる公園草の花　池田　忠山

◆こよろぎ（11・9）　つとむ報

仏前に先づは一献今年酒　髙杉掘三朗
悪友と夜長の酒や眠くなり　板谷　雅泉
退院を待ちて作りぬ菊枕　植松テル子
ふともらす流離の思ひ温め酒　神山つとむ

◆青梅（11・8）　幸子報

蜜柑捥ぐ手に喜びの五つ六つ　大塚　行人
熟柿落ちあとは深閑谷戸の寺　湯本とし子
野辺送り戻りて一人秋耕す　加藤まり子
立冬の小石をはじく鍬仕事　久保寺トミ子
秋天をゆっくり押し引き太極拳　田中　幸子

◆みなみ（10・22）　かほる報

悲しみも苦もあるがまま新松子　柳川　紀枝
新調の靴はわがまま草紅葉　加藤　富江
伸びるだけ背筋伸ばすや風は秋　加藤れい子
老いの身の梯子あやふし新松子　加藤　健治
船頭の歌声高し萩こぼる　市川めぐみ
散骨の友の気配か秋の蝶　豊田　幸枝
赤い羽根付けて一日の旅衣　斉藤　静
秋の川かがみのような川面かな　小瀬村信子
新松子礼儀正しき小学生　加藤かほる

◆たけのこ（11・8）　悦女報

空青く障子に揺るる柿暖簾　三木　泰子
濡縁にひらりと降りて秋の蝶　徳田　公子
草の実をつけて生き生き犬戻る　小宮　早苗
くぐり来る秋風拾ふ厨かな　久津間百合子
見はるかすコキアの丘に娘と二人　宮崎　悦女

◆鷹（11・4）　十五報

荷を解く金木犀の見ゆる宿　青木　孝子
吹き降りのひと日ありけり林檎煮る　池田　令子
家内のいづくこほろぎ終夜（よもすがら）　西賀　久實
小魚の閃く水路稲架日和　佐宗　欣二
旅の荷を解く日暮や林檎むく　須田　晴美
霧湧くや登山電車の軋む音　中田　笑子
教室に脂粉の匂ひ文化祭　百川　秀子
口笛に子犬のワルツ花野径　山﨑美知子
取り壊す家の落書き秋惜しむ　柏木　良花
伴走の赤き絆や秋日和　庄司　下載
薪に焚く湯のやはらかきちちろかな　瀬戸　りん
衣被取越しを子に疎まるる　高橋久美子
さざ波に走る夕光鳥渡る　中山智津子
蓑虫や昔は父の怖かりし　齊藤　桂
夕映の富士を真面や稲架くる　芹澤　常子
爽やかや議長の脇の手話の人　大木　敬子
秋天や女生徒の吹くスーザフォン　大島美恵子
柿渋の帆布リュックや小鳥来る　田下　昌人
吹き抜けに響く呼び鈴文化の日　中根　和子
古民家の長押の黒し茸汁　加藤　幾代
山茶花やサドルを跨ぐ尻巨き　高橋千代子
巨磐（おほいは）に根を張る松や秋の雷　守屋　まち
霜降の三日月赤し電車待つ　米山　翠
富士見えて金木犀の咲き誇る　來田　新子
住みなれし借家もよかり秋刀魚焼く　大沢　年子
押し込めば押し返される落葉籠　片野　秋子
十一月山裾の湯に遊山かな　小林　環
立てかけたラグビーボール冬田面　下平　美子
吟詠の年寄多き寒稽古　鳥海　壮六
ひかりつつ移ろふ雲や落葉掃く　古屋　德男
山門を自在の猫や神の留守　村場　十五

◆実のり（11・16）　たか志報

幼なき日甦りたり冬星座　岩本ひさみ
縁側におはじきの音花八つ手　杉本　久子
亀の甲羅十一月の日の匂ひ　木村　幸枝
冬月夜晒し切つたる屋根の石　新井たか志

◆零（11・16）

山眠る湖底に人の過去沈め　史郎報
野にひとり揺らせばさみし女郎花　青木たけを
落葉降り小枝に残る熟柿五ヶ　伊藤　道郎
歩きたい秋草は朱に香は天に　川合　昌子
夕映えや吾が身を写す女郎花　佐藤　正子
世界を見て日本を知る秋の夜　中村　裕子
寒芒無実貫く袴田翁　野川木一路
　　岡本　史郎

◆草むら（11・19）

土盛りや芋を寝かせる冬構　重満報
極東の猫春眠す朽ちるまで　石井　秀稀
酉の市貧乏神のオロオロと　佃　悦夫
　　佐々木重満

◆無所属

言へないこと言へて白菜真二つ　小林永以子
をさなごにあしたはとほし草の絮　畠　梅乃
行平の粥の噴く朝小鳥くる　一ノ瀬茂代
菊人形この世の難に武者震ひ　北村　文江
神の留守今日は許そうこの嘘を　大佐田うづき
走り蕎麦迎へに行ってしまふ口　出澤　洋子
秋の蝶見えぬ余生の眼鏡拭く　山口　千代
霜月や連日予報夏日なる　蓑宮　わか
小田原城忍者の走る鵙日和　岩楯惠津子
秋の声手先かさこそ言い出しぬ　岡田　典代
いぼり虫死にゆく時も鎌揚げて　木村美千代
椋鳥のしばし騒ぎて日の暮るる　山本　すみ
蟇出でて独居独居と鳴きにけり　大石　雄介
限界集落あさがお愛しすぎた人　大石　和子
袖口の汚れ熱過ぎるから熱燗　瀬戸　正洋
経本の千巻の黙冬ざるる　須田　聡子
すくと立ちなよなよゆるる紫苑かな　神野美代子
秋晴やぐいと近づく伊豆七島　山田　照子
縄文土器罅の広がる鵙高音　田畑ヒロ子
イテウォンに若き命は雪となる　穂坂志げる
枯蟷螂往生際のひと睨み　小澤　園子
風呂敷に包めば秋意濃紫　杉山あけみ
白髪染め雪の本性隠しをり　小島ノブヨシ

新作５句

岩本ひさみ

山茶花や口喧嘩した母思う
年つまる時の流れの急ぎ足
もやしの根丁寧に取る掘炬燵
八十路越え己のペース冬の朝
寒晴れや空に向かって深呼吸

俳句おだわら鑑賞

足立　和子　（令和5年9月号）

鈴虫や風止み空へ澄み渡る　松下　俊之

木々のすれる音、ざわめく葉ずれの音、鳥の鳴き声までが嘘のように止った。

鈴虫のこえが静謐な空気に包まれ、涼やかで美しく鳴く声が空に響き渡る。まさに、子供の心のように翳りのない澄みきった心境、静かな平和な空間が想像される。

北原白秋の詩に「子供に還らなければ、何一つ、この忝（かたじけな）い大自然のいのちの流れを、ほんとうにわかる筈はありません」という一節がある。又「俳句は自然に対する挨拶である」と言われています。この句には、子供のような純粋な目で見た自然の真実が映し出されていて共感を覚えます。そして全ての語句が適切に使われていて生き生きとしていると感じられる。

私も心に「子供の目」をもって今後の俳句づくりを心掛けたいと思います。大自然に素直に向き合い会話をしていけるよう。そして刻・刻に刻印しつつ人生をつづっていけたらと思います。

新作５句

岡田　典代

端々は人の手で刈る稲を刈る
玄関に住んで動かぬ大かまきり
秋晴れや肩をぐるぐる回す人
くしゃみしてブタクサのせい誰のせい
生きようと里に来た熊柿熟れる

杉山あけみ

運命と言えばそれまで裂け石榴
あきつ飛ぶ空へページをめくる音
歩いても行ける距離です女郎花
木の葉蝶の羽は字余りの余韻
全方位外交草の実の弾け

峯尾ユキエ

峰入りの終宴わびし夜長の灯
烏爪電線ぶらり四分音符
冬銀河ほんとの願ひ言へずして
夜半の冬三半規管ざわざわと
頬寄せて寒夜の絵本きりもなや

山口　千代

里紅葉行くに行かれぬ湖の底
木道に躓づき遥か草紅葉
事もなく阿修羅の流れ散紅葉
百畳の一畳に座す寺紅葉
はらからは宿の女将や照紅葉

高井幸子

（令和5年7月号）

辞書にない生き方もあり余り苗　石井千代子

田植えを経験するようになり、余り苗のことがいつも気になっていました。機械できちんと植えられた苗は、あるべき場所に立ち自信を持って気持ちよさそう。余り苗は、田の隅にとりあえずまとめて置きます。でも出番はあるのだろうか。そんな気持ちがこの俳句に出会えて嬉しくなりました。「辞書にない生き方もあり」がとても良かったです。

中根登美子

（令和5年10月号）

秋茄子や晩年という自由席　豊田　幸枝

若い頃は仕事や育児等に追われて、自分の自由な時間は限られていました。子育ても終り、ふと気が付けばもう晩年という今日この頃です。

果てし無く続く夢や希望にわくわくしている作者の心情が良く見えて来ます。晩年の自由席に込められた明かるい前向きな作者の気持を、秋茄子の艶と輝きで更に一句盛り上げています。

立春句会のお知らせ

日　時　令和6年2月4日（日）雨天決行
集　合　小田原城天守閣　本丸広場　10時
短冊つるし後句会　・短冊は12月理事会にて配布（立春・梅に因んだ句、1月の理事会または当日に持参下さい）
句会場　そびそ二宮呉服店2階（元オービックビル銀座通り反対側角）小田原市栄町2ー13ー1
（電話0465ー22ー8121）
＊なるべく食事を済ませてご参集ください。マスク着用等。
会場利用時間　12時～15時（受付12時～）
会　費　五百円（賞品代等）
投　句　当日嘱目3句を短冊にて（受付にて配布、締切12時30分）
句　会　13時より総互選　披講は各自
＊事前申込の必要はありません。お仲間（会員以外も可）をお誘い合わせの上現地にご集合下さい。

令和五年 年間ベスト一句集案内

一、無所属の方は、広報部あて「ベスト一句集」としてはがきで送稿して下さい。
一、〆切り　令和6年1月12日（2月号掲載）
一、送稿先　〒250-0042 小田原市荻窪五四九ー一七
小田原俳句協会広報部　村場十五

小田原俳句協会　〒二五〇ー〇〇一二　小田原市本町二ー一三ー二　池田　忠山方